

序  
源氏物語をめぐる  
「風景」



「風景」とはなにか。むずかしい議論をしようというのではない。

遠く隔たった時代は、遡及してみるだけでも困難をとまなう。時間の経過によって可視化できる範囲がせばまり、物理的にも心理的にもさらに遠い存在になってゆく。文字どおりに可視化できる領域をふつう「風景」とよび、さらに何らかの手だてをへて可視化されたのと近い程度に認識された事象を、右と同じく「風景」という表現であらわすこともすくなくない。

お隣の分野、日本史学の——わけでも一九八〇年代からの日本中世史研究の盛況ぶりは、その刊行点数や「中世」を冠した多様な書目のかずかずに鮮明にあらわされている。そうした、私たちの畑からみれば対岸の、目立つ現象の影響は身近にも波及してきて、——思いつきの例で恐縮ながら——たとえば「中世の風景を読む」というシリーズの論集（新人物往来社、一九九四～一九九五年刊）があつて、わが貧しい書架の一隅にある。類例の多い「論集」のひとつではないが、その全七巻の各巻冒頭におかれた「刊行にあたって」と題する、編者の網野善彦・石井進のふたりの名義の序文に、まず注目するところからはじめたい。

歴史研究において、中世という時代の見直しが提唱されてから、速くも十数年の歳月が流れた。中世封建社会という固定化されたイメージから、より活動的で具体的な中世的世界像を再構築することをめざして、従来の一級資料とされてきた文字史料のほかに、新たに考古資料、地名、絵巻物、伝説、歌謡など様々の史料を発掘し駆使しながら、中世に生きた人々の生活と意識を探る方法が試みられ、数々の成果があがってきている。

——と。そして、シリーズ名の一部になった「風景」をめぐる、つぎのように敷衍している。

日本列島を豊かにつつまこむ海とそこを舞台に、広くアジア大陸まで自由奔放に活動した中世人をイメージした巻構成、そして各巻は中世に生きた人々の生活と心を風景として描き出すために「都市・村落・信仰・流通・職

人」の五つの主要なテーマを設定し、また中世的な地域文化の特色が表出できる論考をも収めている。

ここに示された「風景」とは、時間のなかに埋没してみえにくくなった過去の事象を、文字史料や考古資料……その他を駆使して「中世に生きた人々の生活と心」を再構築してみせた景観をいう用語である。もちろん私たちの肉眼でみることができないわけではないから、言語機能としては比喩というべきであろうが、他の諸機能を駆使して仮設空間内に再現し、それを眺望する、という意味では「風景」と表現するほかない。

また、「風景」ということばを使わずとも、一九九〇以降の中世史研究では標的とするところ均しいものはそこそこに見いだすことができる。これもわが書架にあった一冊を任意にとりあげてみれば、たとえば一遍研究会編『一遍聖絵と中世の光景』（ありな書房、一九九三年一月刊）がある。『一遍聖絵』は、鎌倉仏教のひとつ時宗の開祖一遍（一二三九―一二八九）の伝記を描いた絵巻。弟子の聖戒の作と伝える。風俗描写が写実をきわめ、絵巻制作の時代の事象が記録される絵画史料として名高い。右の書は、当該絵巻研究の先進的な成果としては発展期のものであったため、一遍研究会は、『一遍聖絵』に描かれた絵画表現およびその詞書を細部にいたるまで詳細に読み解くことで、今まで見過ごされてきた何か明らかにするにちがいないという確信に近い推測と、そうした推測を、ジャンルの異なる研究者が同一テーマとして共有する具体的な問題に置き換えたらどうなるかという実験的な興味とから成り立した。

という見とおしを述べ、

本会の最終的な目的は、『一遍聖絵』に描かれた二次元平面の静止画像に、時間軸を加え、立体化し、律動する画像を結ばせることにある。静止して生きている風景を、欣喜して躍動する光景に置き換えることである。

という、最終的な目標を示している。ここでは「風景」と「光景」を区別しているが、素材とする対象が絵画史料であるための用語選択と解すべきだろう。対象が文献資料、あるいは本書のそのごとき文学作品ではどうか。文章で書かれた内容に「時間軸を加え、立体化し、律動する画像を結ばせ」た結果、ある仮設空間のなかで可視化しうるとすれば、それはやはり「風景」としかいいようがないのではないか。

本書は、ここ一〇年あまり、古代後期——というよりも、文学でなじみのある呼称では平安時代というべきであろうが——の散文作品の「風景」ということに拘泥して、いくつかの論説を表明してきたことを集約して報告するものである。

当該期の文学研究において、「風景」という語を標題に掲げた専著は、管見のおよぶ範囲では、三つの先蹤を見いだす。すなわち、高橋文二『風景と共感覚——王朝文学試論』（春秋社、一九八五年九月刊）、清水婦久子『源氏物語の風景と和歌』（和泉書院、一九九七年九月刊）、そして小山利彦『源氏物語と皇権の風景』（大修館書店、二〇一〇年五月刊）の三者である。しかし、三者間での「風景」の用法にはすくなくならぬ差異があり、追隨する論考に乏しいところを見れば、いまだテクニカルチームとして公式化され認知されている用語ではないらしい。秋山虔編『源氏物語事典』（別冊国文学No.36、學燈社、一九八九年五月）に「風土」と並んで「風景」の項があるのをかろうじて見いだせるが、同項の執筆者の倉田実が高橋の著を引き合いにしつつ「源氏物語においては物語を読み解く重要な術語」と力説するものの、数多い類書には項目すらなかったのがその当時の現実というものだった。

高橋文二は『風景と共感覚』の冒頭で、みずからの著述に用いるところの「風景」をこう定義する。

摂関政治下の王朝人の心がいかに自然を見、捉え、表現していったか、という人間と自然との関係まぎに関する。ここで風景とは単なる自然の景観の謂ではなく、心象としての風景に近い。

（同著三頁）

——と。さらに語を継いで、「景観としての自然の印象が」「記憶の底に沈み、折々は蘇って今の心を揺する」「そういった心の形とも言うべき自然の印象を総じて「風景」と称し、そこに「王朝人の心に深く関る特にその慰藉的・浄化的なありようを探る」ともいう。

一方、清水婦久子は『源氏物語の風景と和歌』の第一章「物語の構想と風景」冒頭で、源氏物語の風景は映像的な場面を作り、その場面は人の情にかかわる深い意味を表す。それぞれの場面は、一つの風景という自立した世界となるだけではなく、物語の展開にも深く関わっている。  
(同著一頁)

と説き、別に「本書では、物語の（自然現象を含む）場面を作る表現世界を（風景）とし、それを文章表現によって作り出すことを（描写）と称する」（八二頁）と定義づけている。清水の著には高橋の「心象としての風景」の部分も引いて、「当然重なる」（八二頁）としながらも、高橋のいう「原風景」「思い出の中の景観」などは含まない、としている。両者の念頭にあり、かつ論中にも用いているところの「心象風景」の用語への思い入れがあると判断しうるところである。

小山利彦は「皇権の最高空間」としての大内裏・内裏における宮中行事、「聖なる空間」としての社寺参詣の行粧に『源氏物語』の雅な風景」が展開しているといい、賀茂・斎院の祭祀、嵯峨院・雲林院などの遺跡をとおして、『源氏物語』の表出した風景を、平安時代という時間・空間に据え」（一八頁）た、いわば復元模型とでもいべき「風景」を見ようとするものである。

しかし、本書は「風景」についての、特に前二者の目指すような、こうした議論には参加するつもりはない。ひとつの景観の描写を織りなす表現が物語などの作品の構造と密接に関わり合うかどうかの判断は、とりあえず本書の庶幾するところではない。高橋がいうところの「王朝人の心がいかに自然を見、捉え、表現していったか」という視点を表現の内部にもとめるのではなく、作者にとってごく自然に現前した歴史的時間あるいは空間という——現在の私たちの見失った（あるいは見失いかけている）——ものを、あたうかぎり復原し可視化する試みをしてみたいのである。したがって、対象となるのは「王朝人の心に深く関る特にその慰藉的・浄化的なありよう」に限定されるものではない。むしろ、私たちには、高橋がいう「単なる自然の景観」すら見えていないのではないか、「単なる自然の景観」もそう単純なものではないのか、という反省に立つ試みである。いわば「保存修景」の模索とでも比喻できようか。したがって、「風景論」などという「論」を目指すものではない。もちろん、いま使ったばかりの「保存修景」という比喻にも拘泥したくない。用語ころがしに終始したくないのである。稿者がいままでたどってきた道筋を例とすれば、つたなくたどたどしい足取りながらも、そのねらいをある程度理解してただけようか。いくつかを任意にあげれば、たとえば以下の例のごとく。

▼例1 『伊勢物語』初段の「ならの京」が、何の根拠もなく「さびれた旧都」などと注記されていたが、平安初期の平城京の記録（『三代実録』『日本紀略』等）や考古資料などを参照すれば、かならずしもそのような抽象的な観念では立体化されない現実があった。↓（第一篇第四章）

▼例2 『紫式部集』『紫式部日記』に類出する「身／心」の対概念をめぐる論は汗牛充棟というべきだが、「身」と「心」の語の周囲を堂々めぐりするばかりであった。現代にいたって深化しつつある心理分析の方法を導入する必要があるのではないか。↓（第四篇第六章）

また、『日記』冒頭の情景は、寛弘五年という時点においたとき、どのような歴史的現在があったのか。そして古気象学的知見は、その情景をより客観化する情報をもたらすのではないか。↓（第四篇第四章）

▼例3 『寝覚』（夜の寝覚）の主人公にとって再生をうながす特別な場所が広沢であった。広沢の池のほとりに

あつた遍照寺は、発掘調査の結果、この物語の主人公の父入道の「御堂」の面影にかようなものであつた。しかも系譜上、作者とされる菅原孝標女とこの地は密接関係にあつたことがわかるのである。↓〔第五篇第四章〕

——このほかにもいいうることではあるが、一篇一篇おなじ手法で説いたものはなく、また、それぞれ別個の問題がおなじ手法で解きうるわけもなく、かろうじて共通するのは、これまでの文学研究には縁遠かつた領域の成果に依存するところ少なしとしかつた、ということなのである。

要するに、とおく存在した、あるいは存在したかもしれない風景を、「修景」するにせよ何にせよ、現前せしめるためには、歴史学であろうが考古学であろうが、はたまた心理学であろうが気象学・造園学であろうが……とにかく手を伸ばせばとどく範囲で使える材料であるならば、何でも使ってみよう、という、ただそれだけの話なのである。あらゆる作品のそれぞれの具体例を前にすれば、「風景論」などというこちたき議論は、本書にとって必要な手続きではないことが判読していただけるはずである。

目次

序 源氏物語をめぐる「風景」……………1

凡例……………20

第一篇 「源氏以前」の風景……………21

第一章 『竹取物語』をとりまく風景——中世への回路をとおして——……………27

はじめに……………27

一 鎌倉時代物語の位相……………28

二 竹取の影……………30

三 説話としての時間……………35

四 「あらしごと」と物語史……………38

第二章 『竹取物語』の風景——「富士の煙」——……………43

一 富士山の噴煙……………43

二 「富士の煙」……………45

三 煙のゆくえ……………47

四 竹取伝承と羽衣伝承……………54

	付、鶯姫と富士市の伝説……………	56
	第三章 『竹取物語』をめぐる風景——桐壺の更衣の基底として——	62
	一 ひとつの竹取伝承……………	62
	二 「影響」「引用」とは何か……………	65
	三 『源氏物語』と『竹取物語』……………	67
	四 桐壺の更衣とかぐや姫の再検討……………	69
	第四章 『伊勢物語』の風景——「ならの京」——	75
	一 「ならの京」……………	75
	二 その後の平城京……………	80
	三 平城宮の相続……………	86
	四 平安初期の平城京……………	90
	五 「ならの京」の遠近法……………	94
	第二篇 源氏物語の風景 I……………	99
	第一章 「源氏」の物語をめぐる風景……………	104
	一 「源氏」であること……………	104
	二 「源氏」という選択……………	108
	三 更衣と按察大納言……………	111
	四 源氏長者の端境期……………	116
	五 「源氏」と准拠……………	118
	第二章 子どもの情景——紫の君の形象——	123
	一 子どもたちの情景……………	123
	二 年齢の意味……………	125
	三 成人の儀礼……………	128
	四 子どもの時間……………	132
	第三章 子どもの領分——「十ばかり」のころ——	138
	一 若紫の巻の一節……………	138
	二 「十ばかり」と「十よ年」……………	141
	三 「十ばかり」は誤誘導か……………	146
	四 もう一つの「十ばかり」……………	148
	五 「十ばかり」と「十二」の間……………	151
	第四章 子どもの風景——おとなと子どもの間——	156
	一 「子ども論」のなかで……………	156
	二 女三の宮と紫の上の形象……………	158
	三 「…ばかり」という用法……………	162
	四 おとなと子どもの間……………	169

付 章	軍記の年齢記述——「十三歳」表記を軸として……………	176
第五章	明石の入道と近衛中将の風景……………	192
	一 「播磨守」の意味するもの……………	192
	二 「近衛の中将」をすて、申給はれりけるつかさ……………	194
	三 「近衛の中将」をめぐる風景……………	196
	四 「播磨守」をめぐる風景……………	210
第六章	源氏物語と近衛府の風景——右大将と右中将——……………	216
	一 近衛府の大将・次将……………	216
	二 紫式部の時代の近衛府上級官人……………	219
	三 大将家と近衛府……………	225
	四 右大将の物語……………	230
	五 物語の右大将・右中将——まとめて代えて……………	234
第七章	〈後家の力〉をめぐる風景……………	240
	一 「後家」の実際——藤原道長の遺産……………	241
	二 「後家」の遺産相続——源経相後妻の場合……………	245
	三 「やもめ」と「後家」……………	250
	四 「後家」の物語——『寢覚物語』の場合……………	255
第三篇	源氏物語の風景 II……………	263
第一章	六条院の風景 一 ——庭園を再構築する——……………	267
	一 いくつもの「六条院」……………	267
	二 植栽記述の比重……………	272
	三 作庭秘伝書の影……………	279
	四 「六条院」をとりまく風景……………	287
第二章	六条院の風景 二 ——作庭秘伝書の影——……………	292
	一 六条院・予祝のかたち……………	292
	二 少女の巻と作庭秘伝書……………	296
	三 胡蝶の巻と作庭秘伝書……………	303
	四 春の町の野分……………	307
第三章	六条院の風景 三 ——その読みかたをさぐる——……………	315
	一 『源氏物語』の「六条院」……………	315
	二 「六条院」復元の諸相……………	319
	三 物語の伝統と歴史的現実……………	323
	四 邸宅における「非在の实在」……………	326
第四章	「大規模造営の時代」の源氏物語——「六条院」をどう読むか——……………	330
	一 「大規模造営の時代」を生きる……………	330

二	理想的邸宅と「大規模造営の時代」	336
三	災厄の中の『源氏物語』	343
四	作者にとつての「物語」世界	350
第五章	『源氏物語』の時代の「喪失」の風景	357
一	火災と「大規模造営の時代」と文学	357
二	「大規模造営の時代」の物語	361
三	楽府進講と舶来の『文集』	366
四	土御門殿の「文殿」	371
五	「大規模造営の時代」のなかの『源氏物語』	376
第六章	『栄花物語』述作者の風貌——火災記事におけるバイアス——	382
一	『日本書紀の謎を解く』	382
二	『栄花物語』の述作者	383
三	火災と造営の記事	385
四	述作者による差異化	387
第七章	薫をめぐる風景——「ほうさうじのわたり」・巨椋の池——	389
一	京都南郊の体験	389
二	「ほうさうじのわたり」	391
三	巨椋の池へ	396
四	巨椋の池の実像一端	404
第四篇	紫式部をめぐる風景	417
第一章	『紫式部集』の風景 一——「かへし 又のとしもてきたり」——	423
一	『紫式部集』一五〜一九番の周辺	423
二	物語のなかの使者たち	428
三	駅伝制後の「便使」「便人」	433
四	「かへし 又のとしもてきたり」の距離感	438
第二章	『紫式部集』の風景 二——湖上の紫式部——	443
一	琵琶湖をめぐる古代・中世	443
二	『紫式部集』の旅路	445
三	琵琶湖の水運と気象	452
四	「かきくもりゆふたつなみのあらければ」の評価	456
第三章	紫式部と鴨川の風景——雨と被災の記憶と——	463
一	土御門殿は雨上がりだったか	463
二	寛弘五年七・八月の連雨	465
三	鴨川氾濫の記憶	469
四	紫式部に被災体験はあったか	472



五	女房の日記として……………	476
第四章	『紫式部日記』の風景 一——「いはむ方なくをかし」——……………	479
一	『日記』冒頭の季節感……………	479
二	古気象学による知見……………	485
三	「をかし」による感取……………	489
第五章	『紫式部日記』の風景 二——「水火の責め」、その序説——……………	494
一	「水火の責め」……………	494
二	被災の記憶……………	498
三	火事と大規模造営の時代……………	503
四	火事と物語と日記……………	506
五	「日記」であることの意味……………	510
第六章	紫式部の心の風景……………	516
一	「心」は「復顔」できるか……………	516
二	「心」の所在……………	523
三	「心」の構造……………	530
四	「身を思ひすてぬ心」……………	539
第七章	『紫式部日記』をめぐる風景——その「効用」について——……………	545
一	自作への言及……………	546

二	日記の「効用」……………	549
三	「憂し」という訴え……………	554
四	周辺の沈淪（詩） 歌人……………	561
五	「憂し」の「効用」……………	566

## 第五篇 「源氏以後」の風景……………

第一章	物語から日記へ、日記から物語へ——物語史の一風景——……………	581
一	「日記」再検討への発端……………	581
二	日記の文体としての物語……………	587
三	日記と物語、交錯の景観……………	592
四	「日記から物語へ」展開する風景……………	597
付 章	平安後期物語の展望一斑——「源氏以後」の可能性——……………	604
第二章	『更級』の風景——孝標の大いなる「凡庸」——……………	610
一	孝標は「凡庸」だったか……………	610
二	『更級』の孝標像……………	612
三	平忠常の乱……………	616
四	乱後の国司・孝標……………	620
五	大いなる「凡庸」……………	624

第三章 『寢覚』の風貌——「源氏以後」の世界へ——

- 一 欠損のある物語……………628
- 二 各巻末尾の様相……………632
- 三 平安後期物語史における巻尾……………638
- 四 「四部構造」ということ……………643
- 五 現存本と資料の発掘……………646

第四章 『寢覚』の風景 一——「広沢の池のわたり」——

- 一 『寢覚』の「広沢」……………652
- 二 「広沢」の遺跡……………655
- 三 「嵯峨」の影……………662
- 四 「広沢」の伝説……………667

第五章 『寢覚』の風景 二——「しらかはの院」——

- 一 失われた環の一部……………674
- 二 「しらかはの院」……………679
- 三 白河院の位相……………686
- 四 白河院の実態……………694
- 五 頼通文化圏のなかで……………702

第六章 『寢覚』結尾の風景

- 一 結尾はどこにあるか……………709
- 二 古筆資料による末尾欠巻部……………712
- 三 『寢覚』結尾への「夢」……………716

第七章 『狭衣』結尾の風景——物語・終焉の位相として——

- 一 結尾の断層面……………722
- 二 物語の（切断）……………726
- 三 『源氏物語』の結尾……………734
- 四 『狭衣物語』の巻尾……………738
- 五 『狭衣物語』の結尾……………745

跋 「風景」の可能性

- 一 伊勢物語と東国事情……………753
- 二 紫式部と孝標女と石山寺……………766

- 初出一覧……………775
- あとがき……………781
- 索引（書名・人名・事項）……………785